



【第5号】2007年8月31日発行

【発行】柏書房株式会社
〒113-0021 東京都文京区
本駒込 1-13-14
☎03-3947-8251(代表)

〈題字〉林英夫

非売品

◆江戸から現代へ

古文書がつむぐ 知的な好奇心

「古文書かわら板」第五号をお届けします。

二〇〇七年二月五日、林英夫さんをご逝去なされました。八七歳でした。林さんは三十年以上もの長きにわたって、新宿の朝日カルチャーセンターで古文書講座を開かれるとともに、弊社においては「近世古文書解読字典」を筆頭とする数々の古文書字典や古文書入門書を手がけ、「古文書

の柏書房」の礎を築き上げてくださいました。

また、林さんには本誌「古文書かわら板」の題字をいただき、創刊号には「柏書房と古文書」を寄稿されました。さらに第二号では北原進さんと「経験から語る上達の極意」と題する対談を行なっていただきました。

社員一同、多年にわたるご恩に報いるため、これからも「古文書の柏書房」の名に恥じない書籍を作っていく所存です。ご冥福を心よりお祈りいたします。

巻頭対談では、近世史学のご意見番であり、また齒に衣着せぬ発言が刺激的で、かつ膨大な研究蓄積があまりの青木美智男さんと、「江戸が大好きになる古文書」(弊社刊)などの著書があり、東北から九州まで全国各地で講座を行ないながら、古文書の面白さと魅力を伝道し続けている油井宏子さんをお招きし、古文書が読めるようになった、その先に待っている楽しみについてお話ししていただきました。

これまでの古文書学習のやり方では
もう物足りなくなってきました（青木）

◆地域史から一歩抜け出そう

青木——油井さん、ご活躍中ですね。

油井——ありがとうございます。

青木——これまで、油井さんのように全国の書店

さんを回って古文書講座を行なっている方というのは初めてじゃないですか。これは画期的なことですね。もう何か所くらい回りましたか。

油井——始めてから二年弱ですが、都道府県でいえば一五、回数でいえば二〇回以上です。

青木——油井さんの講座を聞きに来る方というのは、もちろん初めて古文書を学習する方もいるのでしょうか、多くの方は自治体主催の古文書講座などに参加経験がある方だと思います。

油井——そうですね。古文書同好会やサークルで講師をしているという方が聞きに来られることもあります。

青木——なぜ、そういった古文書の経験者やベテランまでが講座を聞きに来るのか。それは現在の学習では物足りなくなっているからだと思います。また、油井さんが出された著書の影響も大きい。油井さんの本を読むと、都市や地方という括りが取り払われて、江戸時代という時代そのものに関心が持てるようになる。

油井——確かに、全国を回って講座を行なう時には、その地域地域に即した古文書を使うだけではなく、江戸時代そのものや、江戸時代を生き

た人などに焦点があたるような古文書を選ぶようにしています。

青木——もちろん、町や村に残った地域の古文書

を読むことは、地域の歴史を学ぶ上では非常に大事なことです。しかしそればかりやっていては、地元には目が向かず、地元の殻から抜け出すことができない。だから、油井さんの著書のような、時代を見る目を養うことができる古文書の入門書が増えて、多くの人たちがそれを読むようになってくれば、もっと学習者も増えてくるし、勉強も楽しくなってくるはずですよ。

油井——そして、古文書が読めるようになったら、ご自分で地域の歴史や家の歴史を調べてまとめ

中学生にもきちんと教えれば、
古文書が読めるようになります（油井）

ていけるようになれば、古文書を教えている側からすれば、大変うれいことです。

青木——書店ばかりでなく、大学へも出張講座をすればいいのに。

油井——大学ではないのですが、私は市川市内の中学校へ古文書を教えに行ったことが何度かあります。市川市で教員をしていたという縁もあって頼まれたのですが、今の子どもたちでも直接教えてあげれば、ある程度は読めるようになるんですよ。

青木——大学生のほうが読めないかもしれない（笑）。大学ではあまり手取り足取り古文書を教えないし、基本的には自分の力で読みなさい、



青木美智男（あおき・みちお）
— 1936年生まれ。東北大学大学院
文学研究科修了。日本福祉大学、専修
大学教授を歴任。現在は立正大学講師。
村落史研究だけでなく、版本や俳句、
番付を素材とした研究をはじめ、時代
小説、歴史教育などまで幅広い。

という場合が多いですから。私の頃は、もう四
〇年以上前ですが、「とにかく読みなさい」「文
書を持っている家を探してきなさい」でしたの
で、全国各地へ調査ばかり行っていました。も
ちろん古文書字典はなかった時代です。
油井——私も学生時代には字典を引いたり、マイ

字典を作りながら、とにかくたくさん文書を読
みました。史料調査も各地に行きました。以前、
受講生の方に「くずし字の偏や傍の見分け方は、
誰かに教わったのですか」と聞かれたことがあ
りますが、自分で勉強をしているうちに気がつ
いたことや身についたことが財産となっていて、
それを受講生の皆さんに、少しでもわかりやす
く理解できるように教えているのです。

青木——油井さんの著書は、初心者に親切な内容
になっていますね。これまでの古文書入門書の
概念を壊した本だと思います。

油井——ありがとうございます。私自身、著者や
講師としてというよりも、読者や受講生の立場
に立った時に、どのような教わり方をすれば理
解できるかな、ということをいつも考えていて、
それを本でも講座でも実践しているのです。

◆江戸と現代に大きな差はない

青木——一時期に比べるとテレビの時代劇の番組数は減っていますが、やはり時代小説とともに、一般の方の江戸時代像形成に大きな影響を与えていることは否めません。藤沢周平の『武士の一分』や『たそがれ清兵衛』など、映画の人気もあつたようですね。

油井——中学校や高校の歴史教科書などは、政治的な内容が中心で、庶民の生活がわかるような記述は少ないですし。

青木——でも、村や町に残った古文書を読み始めると、これまでの自分の江戸時代観が一変するわけです。自分の知っている江戸時代と全然違うじゃないかと。

油井——まさにそれが古文書を読むことの面白さであり醍醐味ですね。

青木——江戸時代の古文書というのは、現代の私たちが非常に共感できる内容のものが多くのも特徴なんです。文章や言葉、人びとの生き方なども親しみやすいんですよ。戦争がない平和な時代が長く続いたからでしょう。江戸時代は本当にいい時代なんですよ。今、大河ドラマでやっている「風林火山」のような戦国時代だったら、親しむなんてことはできませんよ。毎日毎日、年がら年中戦争していますから（笑）。

油井——古文書を学習していると、くずし字が読めた時のうれしさももちろんありますが、内容が理解できた時のうれしさ、さらにその内容

これまでの江戸時代観が一変するのが古文書です（青木）

江戸時代も現代も

人間の本质はほとんど変わっていません（油井）

に共感できた時の楽しさや感動がありますよね。

それができるのが江戸時代の古文書なんだと思います。

青木——古代や中世の文書では、なかなかその感動は味わえないですね。

❖受身から能動的な学習の時代へ

青木——これまで古文書は、研究者や一部の郷土史家が論文などを書くために使っていたわけですが、最近は変わってきました。江戸時代を学ぶ場合には、誰かに教わるか、他人の文章を読んで勉強するというのが一般的でしたが、今は自分で古文書を読んで、自分で調べるとい

代になってきたのではないかと思います。受身の学習ではなく能動的な学習の時代ですね。

油井——私たち現代人が一五〇年、二二〇年以前上の江戸時代の古文書を読んでも、そこに古さを感じないんですね。もちろん、江戸時代と現代とは生活の様式がまったく違うけれど、人間そのものの本质はあまり変わらない。古文書からは、人間の面白さというか、今の自分たちとちとちとも変わらない、江戸時代の人たちの喜んだり怒ったり悲しんだり笑ったりしている姿が見えてくるんです。これは自分で古文書を読むからこそ見えてくるものであり、理解できることなんだと思います。



油井宏子（あぶらい・ひろこ）

——1953年生まれ。東京女子大学文学部史学専攻卒業。公立中学校教諭を経て、1989年からNHK学園古文書講師。2005年10月の福岡市を皮切りに、「楽しく学べる古文書講座」を全国各地の書店で行なっている。

青木——そして大事なものは、現代も江戸時代も定住社会だということです。江戸時代の人たちは、村から逃げられないし、簡単に移住ができなかった。現代人も、都市部で家やマンションを買ったりすれば、そこに定住するし、地方では代々同じ場所に住んでいる方が多いです。そ

して、仮に他地域からの移住者であっても、現在住んでいる場所を「終の棲家」として、生涯を送るようになるわけです。そうになると、その地が故郷となるのですから、その故郷に関心を持って、歴史を調べてみようと思うようになるのはごく自然な感情です。

油井——そこで古文書が登場するわけですね。

青木——従来の郷土史というのは、中央の歴史のなかに郷土の歴史を位置づけるという方法でした。実はこれは今でもあまり変わらない。でも、自分で古文書を調べてみると何かが違うことに気付いてきます。ですから中央の歴史への位置づけではなく、自分の郷土から中央の歴史を見直すという歴史感覚を養っていかなければならぬのです。

歴史を継承する若い世代を きちんと育てていかなないと、大変なことになります（青木）

❖若い世代を育てたい

青木——六〇歳の定年まで会社勤めをしていた方やその奥さんたちが、定年後の人生をどのように送るのか。自由になる時間が増えるのです。もう一度経済活動に戻るといふ方もいるかもしれませんが、多くの方は文化活動に向かいます。その時に、歴史、文学、俳句や短歌、書道、外国語、いろいろな選択肢があります。古文書だって選択肢の一つです。今後はシニアの方々だけをターゲットにした大学も増えてくるでしょう。それだけの需要があるということです。

油井——そうですね。私の受講生も多くはシニア世代ですが、なかには三〇代や四〇代の方が

いらっしゃることもあります。時間的な制約が大きいとは思いますが、若い世代の方々にも、もっと古文書に親しんで欲しいのです。先ほどもお話しましたように、中学生も興味を持ってくれるのですから。我先にと競いながら大きな声で読んでくれます。

青木——若い世代をどのように育てていくかというのは、これからの大きな課題でしょう。シニアだから読めて、若いからくずし字が読めないということはありませんから。また、古文書は全国に億単位で残っていますので、まだまだ未整理のものがたくさんあります。でも、これだけの古文書が残っているということは、いつで

も誰でも世代を問わずに、すぐに学習ができる状況にあるということだし、チャンスなんですよ。

油井——若い世代で歴史に興味がある方なら、その歴史の一番原点である古文書にも、きつとのめり込めると思います。

青木——ぜひとも古文書の世界に入ってきて欲しいですね。油井さんの本を読めばすぐに古文書が読めるようになるんだから。

油井——小説よりも面白い史料がたくさんあります。古文書への入り口は時代小説でも時代劇でもなんでもいいんです。とにかく、一歩足を踏み出してください。私の著書や講座がその手助

私の著書や講座が古文書の世界へ入る手助けになればうれしいです（油井）

けになればうれしいです。

青木——若い世代が育っていないかと、日本の近世史は衰退していく一途です。郷土史家なんて言葉はなくなってしまうかもしれない。インターネットに書かれていることだけが正しい歴史、ということになりかねないですからね。

——本日は長い時間、ありがとうございました。

（二〇〇七年六月二八日／柏書房会議室にて）

林先生とカルチャーの講座

北原進
Kitahara Susumu

昔々の話である。私がまだ院生の頃だったと思う。地方史研究の若手委員がガヤガヤやっているところに、林先生がやってきて、「これなんて読むんだろ」といいながら、古文書の一字を示された。解読字典なんてまだ無かった時代で、皆が当てずっぽうに推論を重ねていたが、やがてこれだという読み方を提示したのが、質問者ご自身であった。それは普通に見られる農村文書で、当時の大学の古文書演習ではほとんど使用される機会の無いようなものであった。区民の文化講座で使うのだとおっしゃっていたように思う。

自治体史が盛行し始め、史料編纂に市民の協力を養成するとか、あるいは文書館設立運動を歴史家だけに留めず、市民運動として展開するためなど、大義名分はいろいろあったが、文化会館などの歴史講座を補う形で古文書講座が始まった。古文書講座は、次第に各地で盛んに開かれるようになり、やがて新宿の朝日カルチャーの古文書講座が、林先生により始められた。先生がまだ五十歳代初めの頃で、持ち前の力一杯の大声が評判であった。その好評にあやかり、池袋コミュニティカレッジの講座が次に開かれ、私が担当さ

せていただいて、現在に至っている。

カルチャアの講座の悩みは、テキストの選定である。残存している古文書に初級・上級のランクがあるわけではないし、講座担当者が自由に使えるものなどほとんどない。だから研究室やお手持ちの古文書が多そうな林先生が、私などにはとても羨ましかった。

林先生は、受講者が若い学生でなくても、厳しく、何度も、重ねて、教えることが「読める」実力を作ることとなると言われ、私の講座が月二回だけであったのを毎週開きなさいと、はっきり批判された。やがて私の講座も月三回、月末は中世文書に当てることが実現できた。

大学外で開く市民対象の古文書講座について、林先生と議論の末に実現したものに、ビデオ（VHS）による講座がある。カルチャアが概して大

都市・県庁所在地で開かれ、村や町の受講希望者は大都市に一日かけて往復せねばならぬと、大いに文化活動参加機会の偏りについて批判をしあつた末である。そして、林先生の呼びかけで松尾正人さん、佐々木克さんに協力を願ひ、ビデオ版『古文書の読み方』全五巻（丸善）が完成した。

なお、地方の人にも古文書講座を、という趣旨で始めたものに、村上直さんと私などが始めた通信講座（日正社）がある。林先生は小出版社でこれを開くことに、心配されながらも大いに賛成してくださり、のちには会報などの執筆にご協力いただいた。おそらく最初から、大放送出版企業でこれを始めるとしたら、林先生は必ずしも賛同してくださらなかったであろう。

カルチャアの古文書講座は、上から制度的に指示されるものではない。手作り、文書・史料を

残してきた在地の人たちと協力し合い、自分も学ぶ機会とすべきもの、これが現在もカルチャー講座を担当している私の、林先生から教えていた

いた心情である。
(きたはら・すすむ 立正大学名誉教授)

林先生古文書講座三十二年の教え

小川幸代

Ogawa Sachiko

この「古文書かわら板」の題字は、林英夫先生八十五歳の筆である。先生は古文書講座の時、黒板にチョークで大きな字を書いて説明なざるのが常であった。五十五歳で新宿住友ビル四十八階の朝日カルチャーセンター（ACC）古文書講座の教壇に立たれてから、八十六歳で病の床に就かれ

るまで三十二年に亘って、どれほど板書されたことか。開講当初から先生の板書をみつめてきた私にとって、「古文書かわら板」の七文字は、先生がお若かった頃の文字や、身振り手振りを交えたユーモアたっぷりの語り口調まで思い出させる、懐かしいものとなった。

活字ではない、手によって書かれた文字からは、書き手の年齢や性格までが推測される。活字になった史料を読むよりも、原史料である古文書を読むことの方が臨場感が湧くのも、そのためである。晩年の先生は、書風と人格との関係に思いを致されていた。次の著作は、「古文書に見る人格」とか「性格」とかいふものだったかもしれない。

古文書が十分に読めるようになった受講者が、二十年経ってもまだ林先生の教室に通ったり、やめてもお先生と交流を続けていたのは、先生から常に、何かしら新しいものを得ていたからではないだろうか。「林節（はやしぶし）」と称する人もいた先生の「雑談」のなかに、深くて新しいものがたくさん込められていた。そのような先生があたためていらした構想が本にならなかったのは残念である。

林先生がACCで古文書講座をはじめられた一九七五（昭和五〇）年頃は、まだ一般の人が古文書に接する機会は少なかった。講座名が「古文書に親しむ」であったこともそれを物語っている。研究者でも学生でもない者にとつては、林先生が準備なさる古文書のコピーがたいへん貴重で、次は何だろうと楽しみであった。

先生は晩年、「昔は、古文書を教える人は、史料館や文書館に勤めている人がほとんどであった。私は家に古文書があつて、それを読んできたから、やってこれたんだよ」と私に語られた。先生は学生や一般の人が古文書を学べるようにと、『近世古文書演習』（立教大学日本史研究室編、昭和四三年）や『近世古文書解読字典』（林英夫監修、浅見恵・若尾俊平・西口雅子編、昭和四七年）を先駆けて刊行された。ACC開講当初は、同時期

に刊行された『入門近世文書字典』（林英夫・中田易直編、昭和五〇年）を推薦なさったので、私はこれを使って勉強した。

ところで、私はいつも心に留めていることがある。林先生は教室で、「古文書が読めるようになったということとは道具を持ったということ。その道具で何をするのか考えなければならぬ」と話されたことがあった。また、「教師が教えられることと教えられないことがある。歴史はダイナミックなものなんですよ」と、黒板に大きく波線を書かれた。この二つのことは、私にはたいへん印象深く、以来、私の課題となっているのである。

私は今、ACCで古文書講座の講師をしている。林先生が入院中に、教室は住友ビル四十八階から七階に移り、黒板はガラス・スクリーンに代わった。先生の病室からは住友ビルが近くに見えてい

た。先生は「来週は行けないけど、次の週は行くから」と、よくおっしゃっていた。だが、ついに教室に戻れることはなかった。先生の脳裏には、四十八階の教室や、窓外に一望される関東平野や富士山やそこに沈む夕日の光景が、いつまでも残っていたことだろう。

私は林先生に出会って古文書を学ぶことにより、その後の人生が大きく展開した。先生が遺してくださった有形無形のもので大切にしながら、私も先生が目指されたものを目指したい。古文書は、読めるようになるまでが面白くて、読めるようになってからがまた一段と面白いのであるから。

（おがわ・さちよ 長岡大学准教授）

寺子屋検定クイズ 正しいのはどっち？

すべて二択問題です。二つとも「正解」という、いじわるな問題も混じっていますが、ぜひ挑戦してみてください。なお、旧字や異体字は常用漢字に直した際の文字を答えとしました。

問1 「名」はどっち？

① 名

② 名

()

()

問3 「成」が含まれているのはどっち？

① 成

② 成

()

()

問2 「金」が含まれているのはどっち？

① 金

② 金

()

()

問4 「車」が含まれているのはどっち？

① 車

② 車

()

()

問5 「リ」が含まれているのはどっち？

① 不 ()

② 市 ()

問8 「く」がまえ」の文字はどっち？

① 島 ()

② 春 ()

問6 「月」が含まれているのはどっち？

① 期 ()

② 朝 ()

問9 活字に直した時の画数が多いのはどっち？

① 月 ()

② 産 ()

問7 「けものへん」の文字はどっち？

① 執 ()

② 根 ()

問10 活字に直した時の画数が多いのはどっち？

① 轟 ()

② 号 ()

● ⑦ 1画、⑧ 9画、⑨ 15画、⑩ 11画、⑪ 10画、⑫ 14画、⑬ 10画、⑭ 10画、⑮ 10画、⑯ 10画、⑰ 10画、⑱ 10画、⑲ 10画、⑳ 10画、㉑ 10画、㉒ 10画、㉓ 10画、㉔ 10画、㉕ 10画、㉖ 10画、㉗ 10画、㉘ 10画、㉙ 10画、㉚ 10画、㉛ 10画、㉜ 10画、㉝ 10画、㉞ 10画、㉟ 10画、㊱ 10画、㊲ 10画、㊳ 10画、㊴ 10画、㊵ 10画、㊶ 10画、㊷ 10画、㊸ 10画、㊹ 10画、㊺ 10画、㊻ 10画、㊼ 10画、㊽ 10画、㊾ 10画、㊿ 10画